

【論 文】

現実味のある文法を目指して： 統語部門と語彙部門の関係を中心に

高 橋 直 彦

0. 摘 要

本論考では、英語に関し、「現実味のある (feasible)」文法というものが充たすべき要件について、とりわけ統語部門と語彙部門の关系到留意しつつ論ずる。現在流布している文法(理論)は、この点に関し、遺憾ながら「安易な立論に基づく、非現実的で牽強付会な理論」であることが多い。

1節では、言わば「外堀を埋める」意味で、言語学という領域から言語を見る立場と言語学の外から言語を見る立場について瞥見する。結論を先取りするなら、外から言語を見る場合、言語というものに対する基本的な謬見が根底にあって「安易な立論に基づく、非現実的で牽強付会な理論」である場合が往々にしてある。このことを筆者が実際に見聞きした事例を基に例証する。併せて、「安易な立論に基づくのではない、現実的で筋の通った理論」の要件について論ずる。

2節では、言語学という言わば「本丸を攻める」。ただし、言語学という領域内部から言語を見る立場であっても実は「安易な立論に基づく、非現実的で牽強付会な理論」があるという点を、生成文法を初めとする多層理論の事例を基に例証する。(生成文法に較べれば理論武装という意味合いが相対的に希薄な伝統文法でも基本的に同様の誤謬を抱え込んでいゝる。さらに言うならば、伝統英文法と大筋同様の枠組に基づくことの多い例えば大学教養課程レベルの独文法・仏文法も実は同様の誤謬を抱え込んでいゝると言えるのであるが、この点に関しては——本論考でも形態音韻レベルの事例を幾つか例示はする((20)参照)もの——統語レベルの問題点等について筆者が現在温めている論考で稿を改めて正式に論ずる予定である。¹⁾併せて、「安易な立論に基づくのではない、現実的で筋の通った理論」の要

¹ 例えば、教場の独仏文法共に、「移動」「削除」「挿入」等の「書き換え規則」(実際にこの用語を使用するか否かはともかく)に依拠して説明している筈である。少なくとも、例えば純粋な構造主義の原則に基づく厳密な「分布」のみに基づく説明といったことは(事の良し悪しは別として)していない筈である。筆者の提唱する「ひな形方式」では、文法内規則(≡共時態)に「書き換え規則」

件——単層理論——について、特に統語部門と形態部門の関係を中心に論ずる。

1. 言語学の外から見た場合の謬見

本節では、言語学の内と外から言語を見た場合に、一般によく見られる相違について祖述する。(この点を論ずるに際しては、まず高橋(2001, 2003)²を参照いただけるなら前提となる基本概念の理解に資する筈である。)以下具体的事例に基づいて論ずるように、外から言語を見る場合、ともすると言語というものに対する基本的謬見が無意識裡に伏在して「安易な立論に基づく、非現実的で牽強付会な理論」となってしまうことがある。

1.1. 「言語」と「文化」との関係に関する謬見

まず、「言語」と「文化」に関する以下の説明を見よう。これは筆者が(本務校のオープンキャンパスでの学科紹介の説明の際に)現実にその場で聞いた説明である。

- (1) 教師:「この図を見てください」(黒板には、大きな四角が描かれ、その内側に何本か柱が立っている)「この大きな四角の領域が人間の「文化」を表します。そして、この柱が「言語」を表します。当言語文化学科ではその名の通り「文化」も「言語」も共に学びます。この学科で学んでゆく際にはとりわけ「言語」が「文化」の一部であるという認識が重要です。……」(因みに、こうした教師による説明を聞いて、手伝いをしていた学部学生の一人が「分かりやすい、分かりやす過ぎる!」としきりに感動していた。)

以上の「理論」に対して、以下反駁したい。

- (2) なるほど確かに「文化」という言葉を極めて広義に解釈すれば、上の説明も成立するように見えるし、何よりも生徒や学生にとっては分かりやすく、受けもいい筈である。なにせ、数十年も前から「文化」「国際化」「コミュニケーション」といった三種の神器的な言葉は、発せられただけで十分な定義づけをしなくとも条件反射的に一般受けする言葉になってしまっているからである。しかしながら、事はそう単純ではない。「文

を想定することは原理上禁止されることになる。

² 高橋(2001)では編集の都合上図や絵が割愛されている。高橋(2003)(ウェブ版)の方には図や絵も含めて掲載してある。

化」という言葉が「言語」をも包摂する概念であるとする立場は、疑いようのない所与の事実ではないし、それどころか「文化」と「言語」とは基本的な点で相対立する概念であると想定する立場すら可能であるし、現にそうした立場も存在するからである。実は筆者もそうした立場に立つ人間である。では、その場合の「文化」と「言語」の定義はそれぞれどのようなものになるであろうか。この場合、「文化」とは「人間が造ったもので、人間が変えられるもの」である。これに対して「言語」とは「(ある意味では確かにかつて人間が造ったものではあろうが) 意図的・恣意的に人間が造れるものではないし (cf. 人工言語という試みの失敗³)、また人間が容易に変えられるものでもない (cf. かつての「方言札」に象徴される「方言撲滅運動」の失敗や「ら抜き言葉」⁴撲滅運動の失敗等⁵)」。(この「言語」の定義は、言わば「否定に基づく定義」ではあるが——いや、さらに言うなら、「定義」というよりは「性質」を述べたものになってはいるが。)「文化」=「人間が造ったもので、人間が変えられるもの」という図式が最も分かりやすい形で端的に現れているのが、いわゆる「制度」である。例えば貨幣制度を考えてみよう。固定相場制という「制度」も変動相場制という「制度」も「人間が造ったもので、人間が変えられるもの」である (もちろん、変える場合は混乱を避けるため移行期間が設けられたりする場合はあるにしても)。しかし、「言語」がこれと同じように行かないのは既に明らかであろう。少なくとも、「言語」を「制度」の一種と見做す一部の構造主義の学説は (流布しているものの) 基本的に妥当性を欠くものである。

もっとも、「文化」=「人間が造ったもので、人間が変えられるもの」、「言語」=「恣意

³ いわゆる双子語 (twin language, twin talk) はどうか。なるほど確かに双子語は当の双子によるある種の「創作」言語ではある。しかしこの場合、少なくとも2点考慮すべき点がある。一つは、この種の「創作」が基本的に語彙レベルに限られるのであって、文法的特徴まで母語と異なるものを「創作」するのではない、という点 (語彙レベルの「創作」なら、実は双子に限ったことではなく、好むと好まざるとにかかわらず「新語」という形で日常絶えず晒され、経験しているところである。e.g. 「じわる」)。いま一つは、双子語は6歳ごろまでには消滅すると言われている、という点である。

ついでに付言するなら、門外漢は「普遍文法」という概念を勘違いして「普遍言語」と頭の中で置き換えた上で、「人工言語」同様「普遍言語」を構想することは夢想に過ぎない、という形で「普遍文法批判」をする人がいるが、これは実に基本的かつ恥ずかしいレベルの誤解である。

⁴ 高橋 (1995) 参照。

⁵ 数年おきに話題になる国語審議会による「国語国字問題」という言語政策はどうか。しかし、これは第一に、基本的には「書き言葉」に関わるものであるのに対し、「言語」の本質は「音声」であって「書き言葉」は周辺の・パラ言語的な位置付けしかもたない、という点に留意されたい (もっとも、それこそ「文化」的な側面から見れば「書き言葉」も重要視されることになるだろう)。卑近な例で言えば、「送り仮名」に関する方針がちょこちょこ変わるために、「考える」~「考る」の「考る」を「カンガル (一)」と読んだりする子供が出てきたりして、笑うに笑えない。第二に、国語審議会による「国語国字問題」はあくまでも (新聞社等に対する)「基準」であって、個人に対する「拘束力・規制力」はもたない、という点に留意されたい。さらに分かりやすい例を挙げるなら、1.2節でも指摘するように、英語:「主要部先行型 (e.g. to school)」vs. 日本語:「主要部後続型 (e.g. 学校へ)」であるが、これを例えば何らかの言語政策によって変更することなどできない相談であることは明らかである。

的に人間が造れるものではないし、人間が容易に変えられるものでもないもの」という図式で全てが単純に割り切れるものでもない。例えば、「習俗」等はある意味「制度」と「言語」との中間に位置付けられる可能性がある——いや、というよりも、「習俗」等は「制度」的性格が相対的に貨幣制度等ほど強くはないというべきであろう。また、いわゆる「文学」は「言語」の中で最も「文化」寄りの営みないし「言語」を援用した「文化」と位置付けられる可能性がある。(このことは、後ほど(8)でも触れるように、(俳句等を除き)文学作品が基本的に「文レベル」でなく「文章/談話レベル」で具現されることと関連するものである。⁶⁾ただし、一部の門外漢が「フィロロジ」を「文学」の一種と推定しがちなのに反し、「フィロロジ」を専門とする学者は、仮に分析対象が「文学作品」の場合であっても、「文学者」と称されるのを嫌って自らを「言語学者」として位置付けるのが普通である。「映画」「演劇」等は「言語」に依存しない割合が「文学」よりも大きくなる分一層「文化」寄りとして位置付けられることになる。なお、いわゆる「社会言語学」と一括りに呼ばれる学問分野の中には、もはや「言語社会学」と呼んだ方がよいほどに「社会学」寄りのものも散見する。(この辺の混沌とした事情には、「己己己己(いこみき)」という言葉を思わず想起してしまう。)このように厳密な定義という点で一筋縄では行かないものの、少なくとも明らかな点は、「文化」が「言語」を一方向的に包摂する関係にあるとする(ある意味俗受けはするが安易な)立場が、所与のものでもないし、普遍・不変のものでもないという点である。いずれにせよ、「文化」に限らずどのような概念にせよ、概念の適用範囲を拡げ過ぎると実質的な意味をほとんど失ってしまう、という点だけは常に留意すべきであろう。

そこで、上記の教室での図式化と説明とは、例えば「この大きな四角の領域が広い意味での人間の「営み」を表します。そして、差し当たりこっちの柱が「文化」で、そしてこっちの柱が「言語」を表します。当言語文化学科ではその名の通り「文化」も「言語」も共に学びます。」とでもすべきであった、ということになる。

次に、日英語の違いに関する以下の説明を見よう。これも(本務校のオープンキャンパスでの模擬授業の際に)筆者が現実に耳にした説明であり、実際には英語で行われた授業である。

⁶⁾ ただし、センテンスレベルではあっても例えば「Less is more.」といったような言い回しは、純粋な言語レベルの「意味」では割り切れない、「文学的」and/or「哲学的」な「意味」をもった言い回しである。「We are what we repeatedly do. Excellence, then, is not an act, but a habit. (人間とは繰り返し行うことの集大成なのである。優秀さとは、だから、単一の行為でなく習慣である)——アリストテレス」等も、各文の主語と補語との関係がやはり「文学的」and/or「哲学的」な「意味」をもった言い回しとなっている。「We are what…」はいわゆる「倒置擬似分裂文 (inverted pseudo-cleft)」。

- (3) 教師：「日本語では「学生さんですか」「はい、学生です」,「学生さんではないのですか」「いいえ、学生です」となりますね。しかし、英語ではこうなります。“Are you a student?”—“Yes, I am.”, “Aren’t you a student?”—“Yes, I am.” いかがですか？否定で聞かれたときに、日本語では「いいえ」なのに対し英語では「Yes」で答えます。面白いですね。ここには日英の興味深い「文化」の差が出ていますね。」……「また、日本語では「窓を開けてくれますか」「はい、承知しました」となりますが、英語では、“Would you mind opening the window?”—“No, I’ll be glad to.” 等となります。ここにも面白い「文化」の差が現れていますね」

以上の「理論」に対しても、以下反駁したい。

- (4) この場合の日英彼我の違いは明らかに「文化」の違いではない。もしも仮に、肯定の意思を示すのに日本語圏では「首を縦に振る」のに対して英語圏では「首を横に振る」、否定の意思を示すのに日本語圏では「首を横に振る」のに対して英語圏では「首を縦に振る」、というようなことであつたとしたならば、なるほどこれは（極めて）興味深い「文化」の差と言えよう。しかし、実はそうではない。まず、上述の前半のやりとりの例での差はそもそも「文化」の差ではない。「言語」の差である。つまり、日本語では「相手の言った言葉である「ない」を受けて、「然り」=「仰せの通り」=「はい」と言っているのであり、これに対して英語では「これから自分の表明する言葉である「am」を先取りして「(学生)である」=「Yes」と言っているのである。つまり、日本語：「そちらの言うとおおり」vs. 英語：「こちらの言うとおおり」、という訳である。(ただし、有馬(2017: 27(1))参照。)これに対して、例えば、こっちに来てほしいということを表す手を使ったジェスチャーが日本では手の甲が上を向き、英語では下を向くといったような違いの話ならば、これ自体は基本的に「言語」を介さないでも成り立つものであるから、興味深い「文化」の差とはなり得る。(ただし、このジェスチャーに対する説明のみであつたとしたら、逆に「言語文化学科」のオープンキャンパスでの説明として適切かどうかは、個人的には疑問であるが。⁷⁾次に、後半のやりとりの例である

⁷⁾ かつて筆者が、英語圏の人で日本在住がかなりの年数に及び日本語も日本文化も心得ている人を日本式の手招きで呼んだことがある。すると、側にいた日本人がすかさず訳知り顔で「日本式の手招きと英語圏式の手招きとの違い」に関するお説を垂れ出した。これには辟易した。当方はそんな違いは百も承知 (I wasn't born yesterday!) の上で「郷に入つては郷に従え」を重視しただけのことである。ましてや、相手はそもそも日本在住がかなり長い人である。言わば、日本に長く住んでいる人(場合によって自分よりも日本在住期間が長い人に向かって)“Do you like sushi?”, “Can you use chopsticks?” 等と英会話教本にでも登場しそうな英文を判で押したように訳くような愚行に類することをしたくないだけである。この手の人は「郷に入つては郷に従え」をどういう訳か日本人が外に出た

が、これもいわゆる「文化」の違いではない。これは、英語の「mind (～)」という単語が「(～)を嫌がる」という意味をもつという純粹に語彙レベルの話であって、即ち「言語」のレベルの話である。その証拠に、「mind」を使わなければ、“Could you open the window?”—“Sure (= Yes).”等となる。ここで、言わずもがなの点を敢えて付言するなら、外国語(実は母語の場合もそうであるが)で発話されたことを査定する際の基準は、「内容の整合性」「文法性」「流暢さ」この三者の関数である、という点である。上の(3)はこのうちの「内容の整合性」⁸を明らかに充たしていない。因みに、近年流行りのCEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)という基準も、よく注意して見れば明らかのように、この三者に対する配慮を重視していることが窺知される。さらにははっきり言うならば、「文法性」と「流暢さ」を仮に基本的に充たしていたとしても、「内容の整合性」を欠いていたなら、そもそもそうした発話は虚しいだけではなくろうか。極端な話、「流暢さ」によって「内容の非整合性」の問題が意図的・非意図的に隠蔽・隠匿されてもしたら、それこそ有害でさえあろう。この点は「言語」の「流暢さ」が歴史的に政治利用された場合の怖さに想いを馳せるならば一層明らかであろう。筆者は個人的には「内容の整合性>文法性>流暢さ」という重み付けをしたいところである。(なお、このうちの「文法性」の基になる「文法」そのものにまつわる問題を従来よりももっとずっと掘り下げて、根底から吟味検討し直さねばならない、という問題提起が他ならぬ本論考第2節の眼目である。)

いずれにせよ、「文化」という良くも悪くも便利なキーワードを援用して「内容の整合性」を欠いた説明をするのだけはやめていただきたい。使用言語が英語なら許されるというようなレベルの話でももちろんない。——いやむしろ、聞かされる側からすれば、外国語で煙に巻かれる方が一層迷惑である。話す側からしても同様である。譬え話で恐縮であるが、昔お釈迦様は「間違っていると分かっている悪いことをすると、間違っていると知らないで悪いことをすると、どちらがよくないですか」と問うた弟子に対して、「知らないですの方がよくない」と答えたそうである。一般の予測とは異なるこの答に弟子が「それは何故でしょうか」と問うとお釈迦様は次のように答えた。「間違っていると分かっている悪いことをする場合は大抵加減をするものであるが、分からないですの場合は加減ということができずに歯止めが効かなくなるからだ」

場合にしか適用しないようで、なんとも不思議なことである。

⁸ 一言で言うなら、大事なのは何語で話そうとも基本的に「論理的に筋が通っているか否か」ということ。分解して考えるなら、「結末性」+「首尾一貫性」ということになるが、注意すべきはここで日英の相違として、英語の場合には(「結末性」や「首尾一貫性」とは言わば緊張関係にある)「多様性指向」が加わるという点である(藤田(2015: 16)参照)。

と答えたそうである。熟読玩味すべき言葉である。

1.2 節の (8) で触れる「論理性」を差し当たり重視しない肩肘張らないいわゆるエッセイ型の文章/談話」の場合ならいざ知らず、オープンキャンパスや授業ではまずは「論理性」を重視した話をしていただきたいものである。それを怠り、話者も聴衆も分かったような気になるというのでは、落語の「こんにやく問答」と大差ない。Native speaker 張りを目指して naïve speaker になったりしたら、それこそ元も子もない。

(ここで、本筋からは少々脱線するが、日本での「オープンキャンパス」という「言葉」が元々は和製英語であるという点は一応認識しておいた方がよいと思われる。この点は少し調べれば明らかとなる筈の点である。もっとも、言葉には「広まってしまうそれが正用法となる」という「勝てば官軍」的な側面もある⁹ので、そういう意味では敢えて目くじらを立てるほどのことでもないのであるが。ただし例えば、World Trade Center を「世界貿易センター」と訳すのは明らかに誤訳である。「世界金融取引センター」とでもせねばならない。この点も少し調べれば明らかとなる筈の点である。Pizza Hut の‘hut’をロゴの図柄に引きずられて「帽子」だと思ひ込む類いも同轍である。あのロゴは「帽子 (hat)」でなく、「小屋 (hut) (の屋根)」を模したものである。)

以上、本 1.1 節では、「文化」という用語を安易に使用する誤謬について概述した。次の 1.2 節では、「発想」「国民性」といった概念を「言語」そのものと混同してしまう誤謬について触れる。

1.2. 「言語」と「発想」「国民性」との関係に関する謬見

さて次に、「言語」と「発想」「国民性」とに関する以下の説明を見よう。これも筆者がある機会に現実に耳にした説明である。

(5) (教師が黒板に以下を板書して)

トピック：日英語の住所の書き方の違い

Blackwell Publishers Inc. 350 Main Street Malden, Massachusetts 02148 USA

981-3108 仙台市泉区天神沢 2 丁目 1-1 東北学院大学教養学部

教師：「ごらん。このように、英語では狭い所から始まってだんだんと広い所へと視点

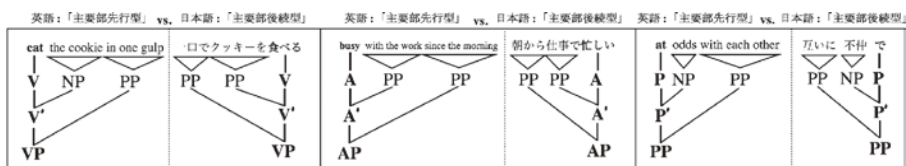
⁹ 高橋 (2001, 2003) 参照。

が広がっていくね。日本語ではちょうどその逆。広い所からだんだんと狭い所へと視点が狭まっていく。ここには、日英両話者の「発想」や「国民性」や「文化」の違いが如実に現れているね。面白いね」

以上の「理論」に対しても、以下反駁したい。

(6) (以下、こんな授業をしてもらいたいという例を示す)

教師：「英語は「主要部先行型」の言語です。だから、Blackwell Publishers Inc. が先頭に来ます。日本語ではちょうどその逆。「主要部後続型」の言語です。だから東北学院大学教養学部が最後に来ます。以下に示す「句構造」の図式を参照してください。¹⁰ 実は日本語では「宮城県」「仙台市」「泉区」等のレベルでも全て「主要部後続型」になっていますね。(ただし、「字(あざ)～」、「大字(おおあざ)～」は唯一例外です。)ここで、「発想」とか「国民性」とか「文化」の違いなどというような雲を掴むような概念を不用意に持ち出すのは止めましょう。言葉にまつわる現象の説明原理はまず言葉そのものに求めましょう。発想や国民性や文化の違い等は、言葉そのものの説明基盤で説明がつかない時に初めて考慮すればいいのです。そもそも、言葉として住所を書くとき英語の語順に従う筈のアメリカの郵便屋さんにしたって、配達の違いをするときは広い所から見えていくでしょう？」



註 5 の最後では、英語：「主要部先行型 (e.g. to school)」vs. 日本語：「主要部後続型 (e.g. 学校へ)」を言語政策によって変更することなどできないことを指摘したが、同様に、両言語のこの種の相違が例えば「発想」やら「国民性」の相違等とは全く別次元の問題であることも明らかである。「発想」や「国民性」の如何に関わらず、英語は「主要部先行型」で話さなければ通じず、日本語は「主要部後続型」で話さなければ通じないのである。

ここではさらに、次のような謬見もあり得る。

¹⁰ (6) の最後に掲げた図式はいわゆる生成文法流の句構造である。実は本論考の主たるトピックが生成文法批判であり、このような句構造も 2 節で反駁されるのではあるが、この (6) の文脈ではこの点は趣旨に影響しない。

- (7) SVO 言語 (e.g. 英語) の話者：結論を先に言う「国民性」(?!)
——「明快で論理的な言語」(??!!)
SOV 言語 (e.g. 日本語) の話者：結論を後で言う「国民性」(?!)
——「あいまいで非論理的な言語」(??!!)

ここまで来るともうコメントする気さえ失せそうになるのであるが、一般の門外漢にはこの種の誤解もどうやら根深くあるようなので、気を取り直して敢えて二三コメントしておく。

- (8) 繰り返すが、(文レベルで) 結論を先に言うのは「発想」「国民性」「文化」に依るのではなく「主要部の位置」の違いと言う「言語」上の特性に依るのである。さらに言うなら、そもそも「結論を先に言う」ということ自体少なくとも2つのレベルに分けて考えなくてはならない。1つは「文のレベルで結論を先に言う」のか、いま1つは「文章/談話のレベルで結論を先に言う」のか、である。「文レベルで結論を先に言う」か否かが概略「主要部の位置」の違いに対応する(「概略」と断った理由は以下で触れる)。「文章/談話レベルで結論を先に言う」か否かが、概略「明快で論理的な話」であるか否かの違いに対応する(やはり「概略」と断った理由は以下で触れる)。近年は学校教育でも「明快で論理的で説得力のある話」の重要性が取り沙汰されるが、これはもちろん「文章/談話レベル」を想定してのことである。そうでなければ(つまり、「文レベル」を云々したものであると考えてしまったならば)、「主要部後続型」の日本語話者は初めから不利な立場に立たされていることになってしまうし、日本語の「主要部後続型」特性を捨てねば「明快で論理的で説得力のある話」を断念せねばならぬ理屈になってしまう。これは明らかに事実と反する。

さて、日本では現状確かに「文章/談話レベル」で「結論後回し」型や「起承転結」型が言わば「横行」しているものの、このレベルは(「文レベル」の「主要部後続型」特性と異なり)技術上改変可能である。改変可能であるからこそ、教育的になんとかしようという動きになっている訳である。(「改変可能」であるのは、既に(2)で触れたように、文章/談話レベルが文レベルよりも「文化」的性格を相対的に強くもっているからである。)ただし、「文章/談話レベル」での「結論後回し」型や「起承転結」型にもある種の利点はある。例えば、「推理小説」や「どんでん返しを指向する文学作品」といったものは、一定の効果を狙って敢えてこの種の型を採用しているのである。(かつて『刑事コロンボ』シリーズがヒットしたのも、1つには先に犯人を視聴者に提示してしまうという「結論先取り」型が推理小説の斬新な一手法として逆に目を引いた

からであろう。——そうした結論にコロンボが如何に推論を働かせてたどり着くのかという点に視聴者の興味関心の方向を移した手法と言える。) 要は「結論先取り型の文章」が馴染むのは「論理性や説得性を重視する文章/談話」が原則ということである。ただし、人間の日常生活は常に「論理性」最優先ともいえないのが(良し悪しは別として)現状・現実である。そういう意味では、「論理性」を差し当たり重視しない肩肘張らないいわゆるエッセイ型の文章/談話が日本に多いことも、そのこと自体は指弾される筋合いのことではない。それこそ「発想」「国民性」「文化」の違いなのである。「論理性」を前面に出した話がいついかなる場合にも最善であるとするギスギスした西欧流の想定こそ疑問視されてしかるべきであろう。要は、真に論理性を重視すべき文章/談話に結論先取り型を適用しさえすればそれでよいのである。¹¹

さて上で、「文レベルで結論を先に言う」か否かが概略「主要部の位置」の違いに対応し、「文章/談話レベルで結論を先に言う」か否かが、概略「明快で論理的な話」であるか否かの違いに対応する、とした。ここで概略という言い方をしたのはには理由がある。上では一応「文レベル」と「文章/談話レベル」とを便宜上分けて論じたが、事はそう単純ではない。例えば、「火の用心」とだけ記した手紙があった場合、この「火の用心」は句であり同時に文であり同時に文章でもある。つまり、文であるか文章/談話であるかは、長さの違いに依るのではなくレベルの違いに存するのである。(さらに言うなら、現実の場面で一文だけ発話されたものは、すべからく同時に文章/談話でもある。) また、例えば「I was about to leave home when the phone rang.」は、確かに純粹な文構造レベルでは「主節+従節」と見做されるものの、情報構造を考慮した場合(つまり、文レベルを超えた文章/談話レベルを考慮した場合)、「文末に焦点が置かれる」読みが適用されるのが普通である。そこで、文構造を重視した「電話が鳴ったとき家を出ようとしていた」よりも「家を出ようとしていたとき電話が鳴った」という情報構造を重視した訳の方が通りがよい。これはなにも和訳の問題というのではなく、英語自体の解釈としてもそうである。上で便宜上「文レベルで結論を先に」云々と述べたものの、結論という言葉の定義次第では実はそもそも意味合いが全く異なってくる。つまり、結論という言葉は「SVO」の「V」という文構造上の概念として捉えるならば、なるほど英語は「結論先取り型」となるが、例えば「I was about to leave

¹¹ 蛇足だが、夏目漱石『草枕』の冒頭「知に働けば角が立つ、情に棹させば流される、意地を通せば窮屈だ、とかく人の世は住みにくい」を斟酌すると、現実はまだ少しややこしいかもしれないが。蛇足ついでに言うなら、かつてSNS上で「小籠包の正しい食べ方」が話題となったことがある由。片や「丸ごと口に入れるのが一番」、片や「肉汁たっぷりのスープを先に味わうのが醍醐味+口の中をやけどしないようにせねば」といった論争。(ご興味がおありの向きは検索されたい。)これなども「論理」の側面もあるし、「論理」を考慮した上での個人的「好み」の問題もあろう。

home when the phone rang.」で「文末に置かれる焦点」という意味で結論という言葉
を捉えるならば、むしろこの文は「結論後回し」型の文となる訳である。そして、こ
の種の文に関する限り、「文構造」と「情報構造」との間に「ズレ」のない日本語の方
がむしろ有利とさえ言えることになる。

それにそもそもの話、「SVO」vs.「SOV」の「S」という概念にしても、日英で意味
合いが全く異なるという点にも注意が必要である。学者によっては（筆者も含めて）
日本語に「S」という概念を認定しない人もいるのであるから。（少なくとも、日英で
の「S」の位置付けが全く異なることだけは明らかである。）一般的に言って、物事の
比較を行う場合は比較の際に依拠する「基準」が共通のものでなければ、そもそも比
較すること自体が意味をなさなくなり、比較作業自体が宙に浮く危険性がある訳であ
るが、実は「S, V, O」いずれに関しても共通の基準を設定することには困難が伴う。（少
なくとも形式、意味、機能、談話構造、他動詞性といった観点からの査定が必要となる。）
この点はいわゆる「言語類型論」の基本概念に対して根底から再考を促す点なのであ
るが、話が大きくなり過ぎるのでここではこれ以上追究しない。いずれにせよ、上で「文
レベル」「文章/談話レベル」に関して概略という言葉を添えたのは、以上述べたよう
な諸々の点を考慮してのことである。

なお、誤解があるといけないので急いで付け加えるが、(6)で「発想や国民性や文化の違
い等は、言葉そのものの説明基盤で説明がつかない時に初めて考慮すればいいのです」と述
べたが、これはなにも例えば「発想」というような概念が出てきたらすぐさま眉に唾をつけ
よ、と言っているのではない。例えば、姫野・安藤（2012）のいう「事態把握」という概念
（「英語：客観的事態把握」vs.「日本語：主観的事態把握」）等は、言葉そのものの説明原理
として極めて有効であり、有望視される概念である。（藤田（2015）に分かりやすい解説と
具体例が挙げてある。藤田はこの概念を「公理」とさえしている。）¹²

¹² ここで、(少々いやらしいが) 応用問題などを1つ。読者諸賢、以下の問にお手すきの折にでも答え
られたい。

「言葉にまつわる現象の説明原理はまず言葉そのものに求めましょう。発想や国民性や文化の違い等
は、言葉そのものの説明基盤で説明がつかない時に初めて考慮すればいいのです。」の応用編。「X'mas
は誤表記で、Xmasが正しい」などというのはよく目にするが、もう少し難易度の高いやつをひとつ。
グリーティングカードで日本人はよく「A Happy New Year!」と書くが、実は「Happy New Year!」と書
くのが本来。「A Good morning!」でなく「Good morning!」と言うのと基本的に同じ。(Cf.「It was a
beautiful morning.」)では質問。以下の諸表現における不定冠詞「a」の出没を司っている原理を考えよ。

- (1) Merry Christmas! (a なし)
- (2) Happy New Year! (a なし)
- (3) Merry Christmas and a Happy New Year! (Christmas に a なし, Happy New Year に a あり)
- (4) We wish you a Merry Christmas and a Happy New Year! (共に a あり)

さて本第 1 節の最後として、第 2 節への繋ぎの意味も込めて、上述 (1.1 節) の「内容の整合性>文法性>流暢さ」のうちの「文法性」に関わる誤った説明の例を見ることにする。

1.3. 「文法性」に関する謬見

ここでは、「文法性」に関わる誤った説明の具体例を藤田 (2015 : 2) より引く。

- (9) 「ある英語教師が黒板に有名人の写真を貼って、“Do you know him?” と訊いた。この教師大丈夫かなあ、と思った。知り合いでもない限りは、“Do you know about/of him?” の方が適切である。さらに ‘him’ は通常照応用法で使用されるため、写真を貼って突然 “Do you know about/of him?” と直示的に訊くのは不自然である。この場合は、例えば “Do you know about/of this man/person?” などと言うのが自然である。」

以下にこの点を補足・敷衍しよう。

- (10) 第一に、「know」=「知っている」ではない。特に「know + <人>」の時は要注意で、英語の「know + <人>」は「その人物を直に知っている/その人物と知り合いである」の意。上記の教室での状況で「この有名人と知り合いか？」などと訊くのは、特殊なケースを除き通常はあり得ない。ここは、“Do you know about/of ... ?” と訊くべきもの。
- 第二に、そもそも第 3 人称の人称代名詞（ここでは「him」）の基本用法は、「当該の発話より前に発話された言語内表現」を指す用法、即ち「照応」用法である。これに対して、上記の「教師が黒板に有名人の写真を貼り云々」という状況は「言語外事物（ここでは写真（内の人物）」を直接指し示す用法、即ち「直示」用法である。直示の場合、第 3 人称代名詞を用いるのではなく指示代名詞「this」を用いて、“Do you know about/of this person/guy/man?” といった訊き方をするのが基本である。

「直示の場合、第 3 人称代名詞を用いるのではなく指示代名詞「this」を用いて」という点に関しては、英語学習者がよくやらかす以下のようなやり取りにも注意した方がよい（上級者と自負している学習者にも結構見受ける誤りである）。

- (11) (不自然 :) “Tom, she is Mary, one of my friends. Mary, he is Tom, one of my colleagues.”
 (自然 :) “Tom, this is Mary, one of my friends. Mary, this is Tom, one of my colleagues.”

もちろん、紹介が済んだ後でなら「he/she」の使用は一向に構わない。「照応用法」となるからである。(例：“Tom, this is Mary. She is one of my friends.”)しかし、紹介の出だしでは「直示用法」の「this」が基本である。出だしで「照応用法」の「he/she」を使うと、基本的に失礼・無礼になる。(そうした効果を敢えて狙って使用される用法も映画等では散見する(e.g.『燃えよドラゴン』の比較的はじめの方に出てくる船上での会話例：対話者2人が共に知らない人物を話者が顎で指して聞き手に「Who is he?」と訊く)が、初心者はむやみに真似をしない方がよい。)因みに、日本語との対応関係を述べれば、「this：こちら」, 「he/she：(訳さない!)」が基本である。(例：“Tom, this is Mary. She is one of my friends.” →「(トム,) こちらはメアリー。友達です。)」なお、ここでの「第1人称代名詞 my」(第3人称代名詞と異なり、第1/2人称代名詞は「直示」!)も必ずしも「私の/僕の」と訳さなくて構わないし、呼びかけの「Tom」等も日本語ではいちいち訳さない方がかえって自然となる場合が結構ある。¹³

さて次節(2節)では、現実味のある文法(理論)というトピックに関して、言語学という言葉が「本丸を攻める」ことにしよう。

2. 言語学の内から見た場合の謬見

本節では、言語学という領域内部から言語を見る立場であっても実は「安易な立論に基づく、非現実的で牽強付会な理論」があるという点を、生成文法の事例を基に例証する。

以下(12)に本節の要点を先取りしてまとめておく。概略を述べるなら、「要素が移動しているように見えるからといって安易に移動規則を想定する」といった点や「He is Tom. → Is he Tom? で、「is」が「he」の前に移動したとも「he」が「is」の後に移動したとも論理的には解釈可能なのに、安易に前者の選択肢しか考慮しない」, 等々といった点が問題となる。

(12) a. 生成文法流多層理論で当たり前のように想定される「構造変更規則=書き換え規則」は、筆者の想定するひな形方式流単層理論では(文法内規則(≡共時態)の

¹³ このように、母語と比較しつつ外国語を学ぶことは母語を改めて振り返る絶好の機会を(学習者にも教師にも)提供してくれるものである。「和訳禁止」を金科玉条とする外国語教師陣はぜひとも再考されたい。元々語感が鋭い人間ばかりなら問題はないが、現実にはそうもいかないであろう。母語の無意識裡の知識が外国語に及ばしかねない諸々の影響とそれに伴う陥穽とを明示するのが、あるいは発見する/させるのが、語学教育や語学学習の極めて大きな部分を占めていることは疑いなくも関わらず、「和訳禁止」はその豊かな可能性を初めから閉ざしてしまいかねないのである。(もっとも、「下手な日本語」に訳す行為は、かかる努力を水泡に帰さしめるものであり、厳に慎まねばならぬが。)因みに、外国語が使用言語である映画等も(テーマ等にばかり目が行きがちで)こうした観点からのアプローチがとかく等閑視されがちなのはなぜであろうか。遺憾である。

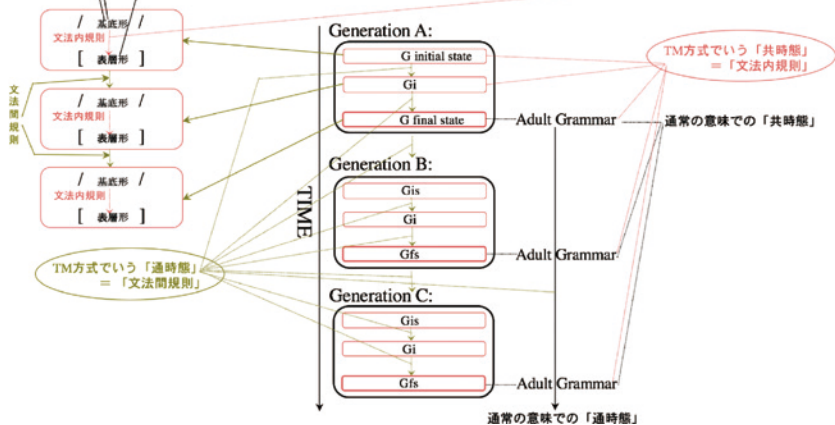
レベルで) 原理的に禁止される。「書き換え規則」を有する文法は非現実的な文法となるからである。

- b. 「共時態」に「構造変更規則＝書き換え規則」を想定すると、子どもにはおよそ獲得不可能な壮大なパズルになってしまい、文法脳内实在論の立場に立つ場合、皮肉なことに直感に反する概念になってしまう(因みに生成文法の主流派は文法脳内实在論の立場に立つ)。
- c. 「構造変更規則＝書き換え規則」の例である「移動規則」は、「方向性に関する不確定性の問題」を抱え込んでしまう。
- d. 「構造変更規則＝書き換え規則」の例である「削除規則」と「挿入規則」も、「削除か挿入かに関する不確定性の問題」を抱え込んでしまう。
- e. 「構造変更規則＝書き換え規則」を想定しないひな形方式流単層理論に較べて、想定する生成文法流多層理論は「経済性の問題」を抱え込む。
- f. 「構造変更規則＝書き換え規則」を想定する生成文法は、自ら重視している筈の「構成素」という概念に関して、皮肉にも矛盾を孕んでいる場合がある。(ただし、この点に関する本論考での詳説は割愛する。)
- g. 「文文法のレベル」を最優先し「談話文法/語用論」を建前上後回しにしてしまうために、直感に反する分析となってしまっている場合がある。(cf. 2.2.2 節)

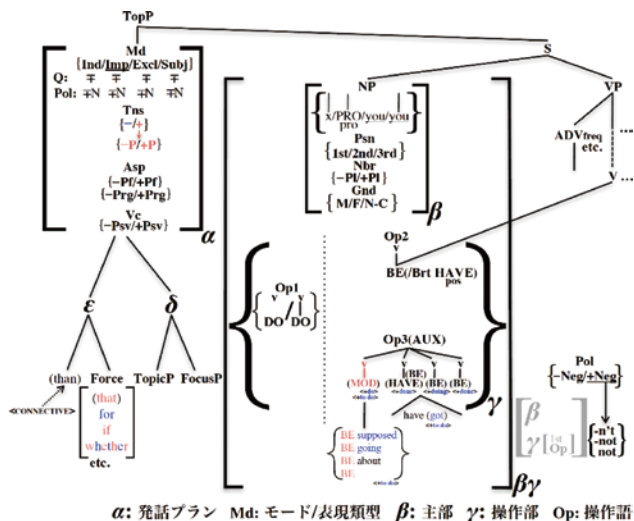
では以下、具体例とともに(12)の諸点を吟味検討してゆくことにするが、まずは、ひな形方式が依拠する「文法構築の際の作業原則」と「文/節のひな形」と「名詞句のひな形」とを以下にまとめて提示しておく。(石橋・千葉・角掛・早川(2018)も参照されたい。)

(13) 文法構築の際の作業原則：

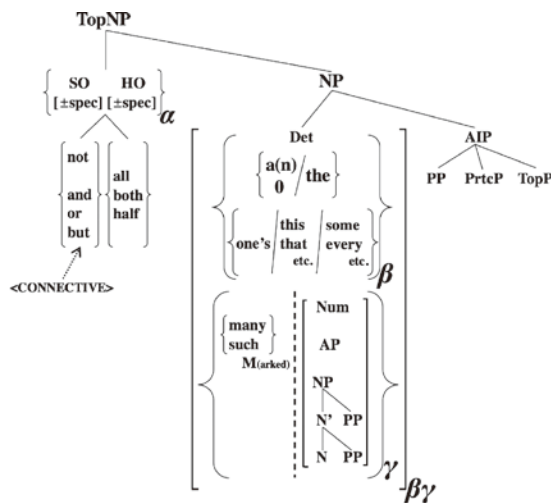
- TM方式における理論構築・文法評価の際の作業原則（高橋(1995)の(28)と基本的に同じであるが、術語の一部変えてある。）
- i. 通時態（＝「文法間規則」）と共時態（＝「文法内規則」）とは峻別せねばならない。
 - 通時態（＝「文法間規則」）は基本的に「変更規則」を用いて規定されIP方式がなじむが、共時態（＝「文法内規則」）はIP方式がなじまない。即ち、共時体系（＝「文法内規則」）内の一般陳述としてはIP方式流に「変更規則」（＝「書き換え規則」）を含んでならない。
 - ii. 共時体系（＝「文法内規則」）は一見IA方式がなじむように見えるが、それは表面的なデータの整理の上でのことで、データを説明するためには、IA方式流に「真形態」を無原則に設定してはならない。即ち、特例（iの原則が保持できない場合）を除き、「一つの意味に一つの形式」という原則を堅持せねばならない。
- 上の作業原則を遂行可能なものとするため、次のようなもう少し具体的な作業原則を設定する。
- iii. iの原則に則り共時体系内に変更規則（＝「書き換え規則」）を含まないようにするために、次の3つの原則を立てる。
 - a. 基底形に記載する情報は最少（minimal）でなければならない。
 - b. 音韻構造（素性階層構造・音節構造等）の「ひな形」がUGレベルと個別文法レベルで規定される。
 - c. 基底形から表層形を導く派生の引き金として、Avoid Void（＝AV）（「空白を避けよ」）＝MATCH（「照合せよ」）という原理がUGレベルで想定される。それは「基底形をひな形に突合わせよ。そして、ひな形に合致させるべく基底形の空白部分を避けよ（埋めよ）」という要請である。
 この原則のパラメーターの値が個別文法レベルで一定に組合わされて出来た操作群が、いわゆる個別文法レベルでの規則であるが、これは「指定規則」であって「変更規則」（＝「書き換え規則」）ではない。
 ひな形式では、基本的に、こうしたひな形照合操作（template-matching processes）の総体が派生（derivation）に他ならないと考える。



(14) 文節のひな形：



(15) 名詞句のひな形：¹⁴



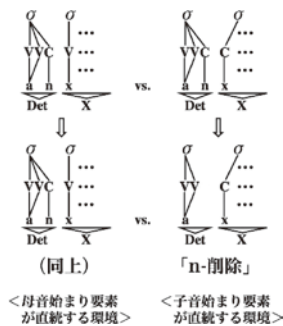
2.1. 形態音韻レベルの分析

生成文法流多層理論対ひな形方式流単層理論の相違を直感的に実感いただくために、まずは分かりやすい事例として、形態音韻レベルの現象である英語の不定冠詞の交替という問題から見ることにする（高橋（2011）参照）。単層理論に関してはとりわけ（13）を参照しつつお読みいただきたい。

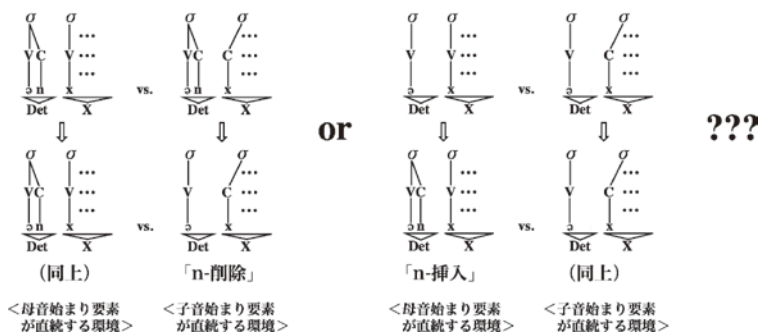
（16）を参照されたい。多層理論に基づくなら、不定冠詞の交替「a~an」は、① 通時的には「n が子音の前で削除された現象」であって、「n-削除規則」が想定されることになる。この点に関しては、（たまたま）史実であり、問題がない。しかしながら、② 共時的には、まず（ア）「削除」にせよ「挿入」にせよ「構造変更規則＝書き換え規則」を想定してしまうことは、そもそも（こうした概念が本来馴染む）「通時態」と（馴染まない）「共時態」との根本的な性質上の相違を看過した致命的な問題を原理的に抱え込むことになる。「削除」か「挿入」かは本来「史的偶然」だからである。その結果、（イ）「共時態」のレベルでは、「子音の前で n が削除される現象」なのか「母音の前で n が挿入される現象」なのかに関し純理論的な「決め手」がないという、非現実的な文法に直面してしまう。

¹⁴ ここでは、藤田（2015）に対する修正版（含誤植の訂正）を提示する。なお、いわゆる「DP 仮説」（Abney（1987））は想定しない。DP 仮説の主要な論拠は「機能範疇絡みの文構造との類似性・併行性指向」であるが、ひな形方式では（15）の（14）に対する類似性・併行性は既に明らかであろう。

(16) ① 通時態：

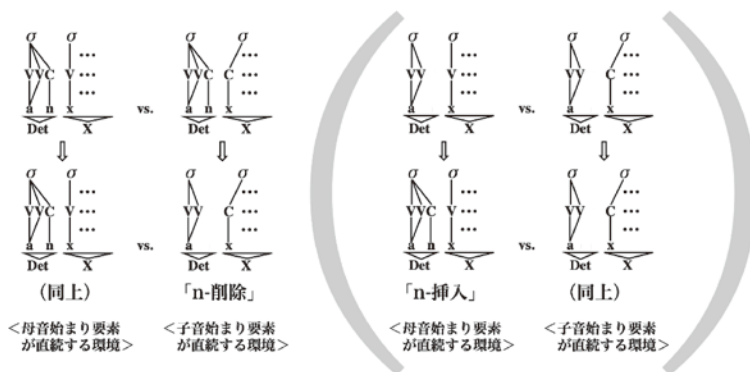


② 共時態：



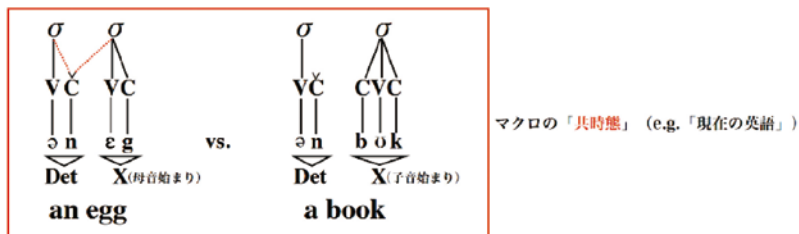
では、ひな形方式流単層理論はどうか。(17)を参照されたい。まず、① 通時的には上と同様「n-削除規則」が想定される。(ただし、「挿入規則」でなく「削除規則」であったという「史実」は、他でもなく「史的偶然」と見る。つまり、仮想上英語とそれ以外は同じで不定冠詞の交替「a~an」に関して「母音の前でnが挿入された」言語といったものの存在も「論理的には」排除されない。)

(17) ① 通時態：



次に、② 共時的には以下のように考える。(13) も参照しつつお読みいただきたい。即ち、まず、いわゆる世に言う「共時態」(例えば「現在の英語」)であっても現実には言語獲得の過程で子どもは初期状態から安定状態(大人の文法)に至るまでの間に何段階にも渡る文法の再構築の過程を経る。(通常の意味でのマクロの「通時態」(英語史)が汎個人的で時間的のスパンが大きい相を指すのに対して、)このレベルは個人的で時間的のスパンが小さい相であり、言わばマイクロの「通時態」とでも呼ぶべきものである。しかし大事な点は、マクロであれマイクロであれ本質は同じであるので、この相を「文法間規則」と呼ぶことにしよう。この相には性質上「構造変更規則 = 書き換え規則」が含まれる(というよりも、「構造変更規則 = 書き換え規則」が含まれなければ、マクロであれマイクロであれ「同じ段階」と考えてよい訳である)。これに対して、通常の意味でのマクロの「共時態」(例えば「現在の英語」)であれ獲得過程の1段階を指す意味でのマイクロの「共時態」であれ、「共時態」には「構造変更規則 = 書き換え規則」が含まれていてはならない、と想定する。この各「共時態」を(「文法間規則」と対比させる意味で)便宜上「文法内規則」と呼ぶことにしよう。「規則」とは呼ぶものの、「文法内規則」には(繰り返すが)「構造変更規則 = 書き換え規則」が含まれていてはならない、という点に特に留意されたい。これがひな形方式の主張の要諦である。具体例を以下に示す。

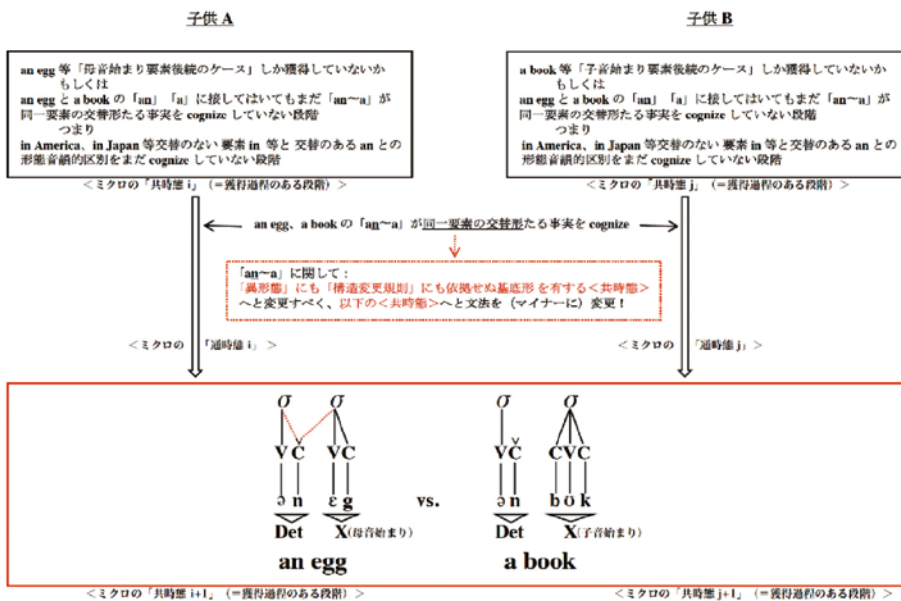
② i. (マクロの) 共時態:



上図で不定冠詞中の σ は「音節のひな形に照合する際に両音節の配置型が可能な場合のみ連結線が引かれる子音」を表す。このひな形方式に基づく説明では、以下の2点にとりわけ注目されたい。

- ① 不定冠詞に構造主義流「異形態」が想定されていない。
 - ② 生成文法流「構造変更規則」(「削除規則」や「挿入規則」)が想定されていない。
- これが(例えば「現在の英語」という)マクロの「共時態」に関するひな形方式に基づく説明である。

ii. (ミクロの) 共時態：



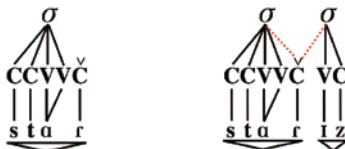
以上をまとめると、以下ようになる。

- (18) a. 多層理論は、共時態に「構造変更規則 = 書き換え規則」を想定することを前提とするが、これは「共時態への通時態の持ち込み」という致命的な誤謬であって、共時態と通時態との理論的弁別が不可能となる。
- b. 結果として、「削除」か「挿入」かに関し、「共時態」のレベルで純理論的な「決め手」がなくなる。
- a'. 単層理論は、共時態に「構造変更規則 = 書き換え規則」を想定せず、共時態と通時態との理論的弁別が可能となるし、かつ弁別される。
- b'. その結果、「共時態」レベルで純理論的な「決め手」がないという事態が出来せず、基底形が唯一的に規定される。

因みに、ここで見た英語の不定冠詞の交替の議論は、英音のいわゆる「嵌入のr」に対しても同様に適用可能である。

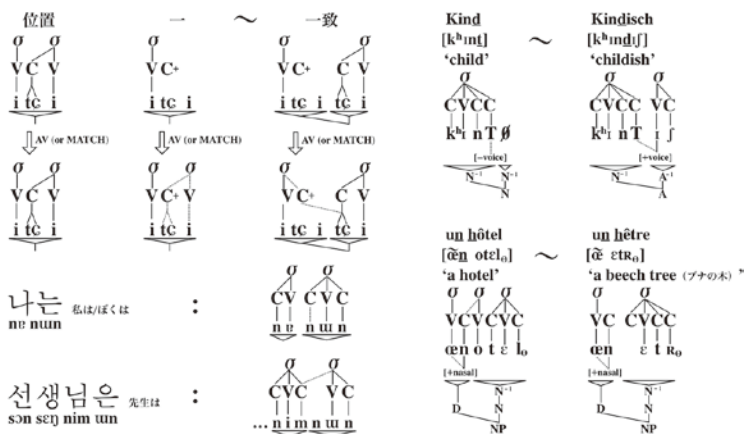
(19) 英音の「嵌入の r」¹⁵

Look at the star. vs. The star is bright.



参考までに、ひな形方式流単層理論に基づく日朝独仏の形態音韻レベルの分析を以下に示しておく（高橋 (2011) 参照）。

(20) (cf. 高橋 (2005) の illegal [l], innumerable [n], irregular [r] の分析)



以上本節では、多層理論対単層理論をトピックとして、形態音韻レベルの現象である英語の不定冠詞の交替と英音の「嵌入の r」のデータを基に単層理論の優位性・妥当性を論じた。次節では、統語部門に関する多層理論対単層理論をトピックとし、同様の論法でひな形方式流単層理論の優位性・妥当性を主張する。その際、統語部門と形態部門の関係に留意することが重要な役割を演ずるという点も併せて論ずる。

2.2. 統語レベルの分析

多層理論の最大の理論的瑕疵は、共時態に「構造変更規則 = 書き換え規則」を想定してしまふ点にある。まずは、Jackendoff (2002) の図式化を見よう。

¹⁵ ひな形方式では「嵌入」 (= 「挿入」) でも「削除」でもない。また、[st] を理論的に CC と見るか C と見るかの問題にはここでは立入らない。なお、「嵌入の r」は「弾音」として実現するのが普通である。

(21)

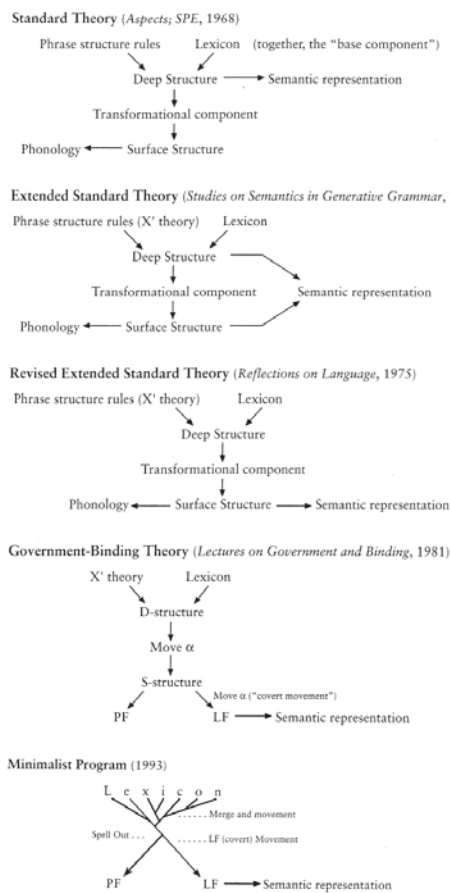


Fig. 5.1. Architecture of Chomsky's theories over the years

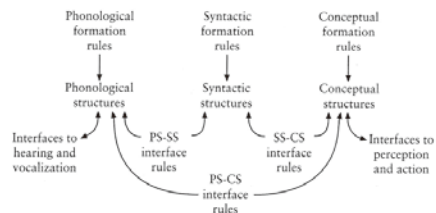


Fig 5.4. The tripartite parallel architecture

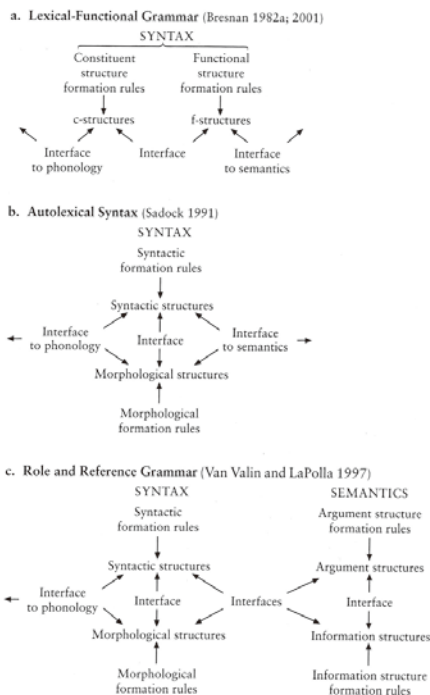


Fig. 5.5. Elaborations on the tripartite architecture

Jackendoff は生成文法主流派に見る多層理論と統語部門中心主義 (syntactocentricism) に対して批判的であり、自らは諸部門を同時併行的に把捉する「Tripartite Parallel Architecture」(Jackendoff (1997)) という枠組を主張する。ただし、TPA は文法の諸部門間にインプット→アウトプットの関係想定しないとはするものの、部門内 (例えば統語部門内) に想定するか否かに関しては中立的である (言質を与えていない)。その意味で Jackendoff の主張は遺憾ながら中途半端なものとなっている。これに対して本論考の奉ずるひな形方式は「部門間」にも「部門内」にもすべからずインプット→アウトプットの関係否定する厳密な意味での単層理論であり、(21) に挙げたいずれの枠組よりも制約された枠組となっている。

前節で見たように、多層理論の瑕疵は、そもそも「共時態」に「構造変更規則=書き換え規則」を想定してしまう点にある ((16) の上の議論参照)。この点を以下再度吟味検討しよう。

生成文法家の中には、「いや誤解だ。規則を想定しているというのは以前の枠組での話であって、例えば極小主義プログラム (Chomsky (1995)) では個別の規則も個別の構文 (e.g. 受動構文) も一切想定されていない。想定されているのは普遍的な原理群と原理群に付随するパラメーター、および辞書に記載されることになる予測不可能な個別情報である」と、判で押したたように主張する人が多い。しかしながら、この主張には不可解な点が幾つも見られる。以下、その点を見よう。主な疑問点を列挙する。

- (22) a. 語彙列挙 (Numeration) に関して。(「受動構文」という個別の「構文」は想定しないと主張するものの,) いわゆる受動文「The ball was kicked.」を収束派生するのに、「語彙列挙 (N)」の段階で既に {the₁, ball₁, was₁, kicked₁, <tense₁>} というように、was と kicked とを予定調和風に語彙列挙するのは何故か。これは英語という個別言語の受動態の形式、即ち <be + 動詞の過去分詞形> という迂言形式を予定調和風に予測したものではないのか。(受動態に迂言形式を援用しない言語もある点に注意!) さらに言うなら、主流派の生成文法ではこれまで首尾一貫して「統語部門以外は解釈部門」という形のインプット→アウトプット関係を主張して譲らない。この「統語部門中心主義」の立場における「生成」→「解釈」という方向性と、「語彙列挙」の段階での予定調和風の語彙列挙との折り合いは理論上どのようにつけるのか。翻って、ひな形方式では次のようになる。受動態は (14) のそもそもその「発話プラン (α)」で [+Psv] と指定される。それに呼応して「γ」中の「Op3 (AUX)」右端の「BE」が自動的に選択され、そこの <+done> の要請どおり、「V」に「動詞の過去分詞形」が配置されることになるのである。
- b. 演算システム (Computation) に関して。(なるほど以前のような「個別の」規則は想定しないものの)「作用」(Affect α) は想定している。これには「移動」(Move α) (代入/付加), Delete (削除), Insert (挿入) が含まれる。いずれも「構造変更操作 = 書き換え規則」である。しかし、そもそも「演算」=「構造変更操作」と捉えるのは論理的必然ではない。即ち、本来「演算」の中には「構造変更操作でない操作」も含まれる筈である。さらに言うなら、ひな形方式では、以下でもさらに具体的に論ずるように「共時態」には「構造変更操作でない操作」のみが許容される、と見る。この操作が即ち「ひな形との照合操作」に他ならない。「共時態」に「構造変更操作 = 書き換え規則」を想定してしまうと、①「共時態」と「通時態」が弁別不可能になってしまい、② 文法脳内実在論の立場に立つ場合、皮肉なことに直感に反する概念となってしまい、③ 経済性の基準に照らしても排除されるこ

とになってしまう。

- c. 「移動」に関しては、例えば「繰り上げ」か「繰り下げ」かに加え「代入」か「付加」という不確定性問題 (indeterminacy) を抱え込む。「削除」か「挿入」かに関しても同様である。理論は一般に「不確定因子」が1つ増える度に課題解決が算術的にでなく質的に困難になる (指数関数的爆発 exponential blowup), という点を認識されたい。極小主義では「個別規則を廃棄した」と言いつつ、実は「規則を種々の因子に解体した上で、その因子を異なる方向性で果てしなく分類している」というのが現状である。因みに、ひな形方式では「移動」も「削除」も「挿入」も想定しないので、不確定性問題を抱え込むことはそもそもない。この点を角度を変えて述べると以下ようになる。—— 極小主義は「普遍文法」を指向するあまり、個別言語の個々の発話の派生に「普遍文法が一々顔を出す」という考え方である。これに対してひな形方式では、「普遍文法が顔を出す」のは「個別文法のひな形を確定するまで」であって、獲得後は「個別文法のひな形」に任され、あとは機械的な照合操作が行われるだけである、と見る。だからこそ、個別言語の操作には無駄がなく迅速なのであり、だからこそ、獲得後は他の個別言語の操作が難しくなる (外国語の獲得が困難になる)、と見るのである。
- d. 極小主義プログラムは、「普遍的な原理群と原理群に付随するパラメーター」を基盤としたエレガントな理論を目指すと建前では言いながら、現実には、例えば、データ上で「移動」しているように見えれば (「転移現象」)「移動」操作を必然的に想定する。また「移動」しているように見えない場合さえ「VP 内主語仮説」(Fukui and Speas (1986), Kitagawa (1986), Larson (1988)) (という「移動」操作を含意する仮説) や「LF 移動」を想定する。そのため、樹形図が「屋上屋を重ねる」が如く果てしなく複雑怪奇化し、結果としておよそエレガントな理論とは言えない代物になってしまっている。文法脳内実在論に立脚するとしている筈が、皮肉にも子どもにはおよそ獲得不可能な壮大なパズルになってしまっていて、当該研究領域がパズル好きの研究者による一大コミュニティ化している趣きさえある。
- e. 以上の点に拍車をかけるが如く、「統語部門中心主義」と言いながら、統語部門に統語的因子以外の因子もほとんど全て押し込もうとするために、統語部門が果てしなく肥大化している。「極小主義によるエレガントな文法構成」と言う割には、樹形図そのものの中に (「便法」とはしながらも)「TP」「IP」「CP」「NegP」「QP」等々の情報が入り乱れて盛り込まれる。因みに、ひな形方式ではこうした因子は「発話プラン」という統語部門プロパーとは別レベル ((14) の「 α 」) で扱われること

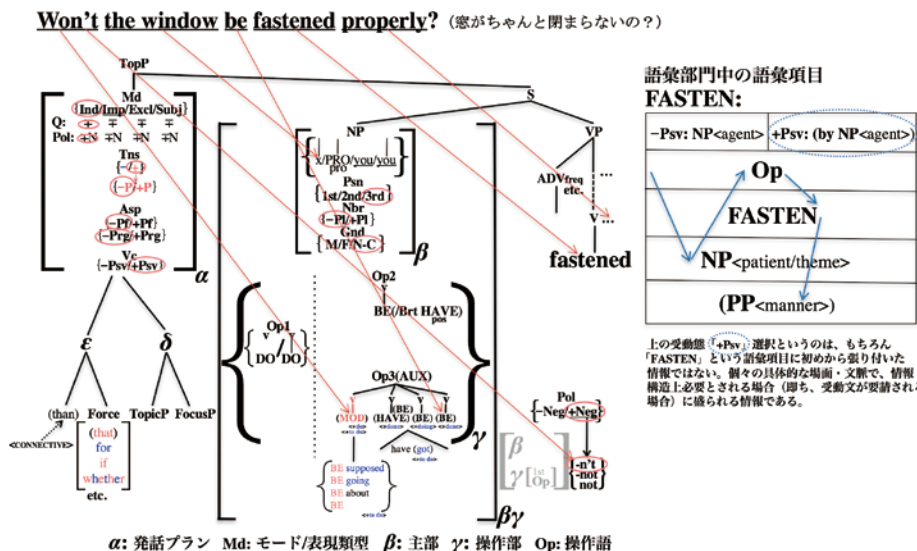
になる。さらには、極小主義では PF に入る段階で PF にとって「見えない」情報は「完全解釈 (FI)」によって全て「削除」されると主張する。これに対してひな形方式では、「削除」は不要と見る。根拠は、①「削除」操作はそもそも「共時態」では許容されない操作であるし、②「削除」自体が無駄な、コストのかかる操作であるし、③ PF にとって「見えない」情報などと言い出したら、例えば「This is the cat that chased the mouse.」等の文における統語構造上の切れ目と音韻構造上の切れ目の「ズレ」はどうするのかといった問題、さらには連結線や範疇記号も「消す」のかといった類いの問題を抱え込んでしまうからである。Syntax と PF はそもそも異質の領域なのであるから、PF にとって「見えない」情報は、見えないのであるから放っておけばいいのである。異質の領域でありつつも同時併行的に処理しているに相違ない（音声を聞いて構造や意味が分かる）のである。また、Chomsky (1995) は Syntax と違って PF には規則を残さざるを得ない、と言っている (cf. Bromberger & Halle (1989))。しかし、この点は 2 重の意味で誤っている。一つはあたかも PF と違って Syntax では規則が廃棄されたとしている点。いま一つは、この点で PF は Syntax とは異質だとしている点である。Syntax では規則が廃棄された、とする点に関しては、既に述べたように、依然として「変更操作」を温存している。また、PF は Syntax とは異質だとしている点も、異質な点はあるつつも、共に「変更操作不要」という点で共通なのである。(cf. (17)②, (19).)

それでは以下、具体的なデータと共にひな形方式の適用例を見てゆくことにしよう。

2.2.1. 受動文・疑問文・否定文の分析

まずは受動文・疑問文・否定文から検討しよう。(23)を参照されたい。(以下、混乱を招きかねない場合に、文/節のひな形 (= (14)) の「Op2」の連結線を一部意図的に省いて表示することがあるのでご了承願いたい。)

(23)



「Won't the window be fastened properly?」(受動文・疑問文・否定文)は生成文法なら「IP」「TP」「QP」「NegP」が必要とされるが、ひな形方式ではこうした情報は基本的に「発話プラン α 」で指定されるものであって、統語構造そのものに盛る情報ではないと考える。また、生成文法なら「移動(含繰り上げ)」が必要とされてしまう文であるものの、ひな形方式では「移動」操作は不要となる。というのも、要素を拾う順序の問題に他ならないと見るからである。ここで大きな役割を演ずるのが「構造変更規則」に依拠しないで済むようにするための理論上の工夫である。まず、文節のひな形(=14)では、「 β 」(主部)と「 γ 」(操作語)とを語順に関して中立な書き方として「意図的に」縦に並べて書いておくのである。生成文法をはじめとする多層文法では、語順が変わる可能性のある要素(転移要素)を(語彙部門でも統語部門でも)横に並べて書いてしまうとそこから話を始めるから構造変更規則が必要となってしまう、と考える訳である。当該文は「+Q」の文である。ひな形方式では、「+Q」の文は「有標」であり、わざと縦に書いた「 β 」「 γ 」を下から上へ、つまり「 γ 」→「 β 」という順序で拾うと考えるのである。これで「 γ (will)」が「 β (the window)」よりも線型順序で先に実現することが保証される。また、この文が否定文であることは、発話プランの「Pol (arity)」の値が「+N」であることにより保証される。さらに、否定文の場合、ひな形右下に指定した「+Neg」のオプションのうち、ここでは「-n't」が選択されたことになる。また、受動文であることは、生成文法なら「繰り上げ」という「移動」操作に負うことになるが、ひな形方式ではそもそもの「発話プラン」で「+Psv」を選択し、それに呼応して「 γ 」中の「Op3 (AUX)」右端の「BE」が自動的に選択されると説明される。受動文の主語「the window」

は初めから「β」の「x」の位置に挿入されるのであって、「移動」操作は不要となる。① 生成文法流に主語位置が初め「空」であったというような英語では許されない構造を仮定する必要はないし、かつ② 能動文と受動文とはその性質上そもそも「視点の置き所」が異なる、役割分担をする別個の2文と見做すべきものなのである。それでも生成文法家は「能動文と受動文との共通項/論理的意味の同一性」といった点を振りかざして食い下がるが、そんなものは「語彙列挙の中身に共通項があるではないか」で済む話なのである。

以上の点を今度は語彙部門の側から眺めてみよう。(23)の右に示した「語彙部門中の語彙項目 FASTEN」を参照されたい。文節のひな形(= (14))の場合同様、ひな形方式では「語彙部門」でも「語彙項目」の記載の仕方を語順に関して中立な書き方として「意図的に」縦に並べて書いておく。「無標」の場合は上から順に要素を拾ってゆくことになるが、ここでは、受動文 [+Psv] であり、かつ「FASTEN」の動作主主語が発話されないケースなので右上の「+Psv: (by NP<agent>)」のうち実現されない場合を選択していることになる。また、上述のように、この文は「否定疑問」なので、文節のひな形(= (14))で言えば先ほど述べた形の拾い方になるが、それが右側に示した「FASTEN」の図では→で示す如くの拾い方に対応する訳である。

以上本節では、ひな形方式流単層理論の場合、生成文法の場合と異なり、受動文・疑問文・否定文が「構造変更」操作に依らずに出力可能(さらには、受・疑・否各操作間の「順序付け」も不要)であることを見た。この結論は「共時態」の理論としてまさしく期待されるものであり、文法脳内実在論的観点や経済性の原則から言っても多とされるものである。不確定性の問題とも無縁な、エレガントで統語部門の肥大化も来していない枠組である。

2.2.2. 存在構文の分析 (+情報構造の分析)

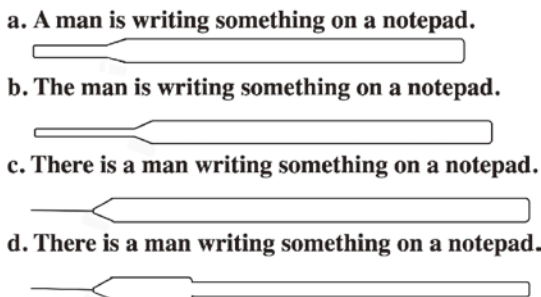
次に、存在構文(と情報構造)を検討しよう。存在構文は極小主義では(「繰り上げ」という「移動」操作と)「挿入」という操作に依拠することになるが、以下で見るようにひな形方式ではかかる操作は不要となる。併せて、生成文法ではしかるべき扱いを受けきれていない情報構造の分析も瞥見する。

(24) を参照されたい。

- (24) a. A man is writing something on a notepad.
 b. The man is writing something on a notepad.
 c. There is a man writing something on a notepad.
 d. There is a man writing something on a notepad.

まず、(24) の4つの文の情報構造を確認しておこう。因みに、(24c) は(24a) の言わば存在構文版であり、(24d) は「writing 以下」が「a man」を後置修飾している構造である。図式化するなら、概略(25) のようになる。幅が太ければ太いほど情報量が多いことを示す。

(25)



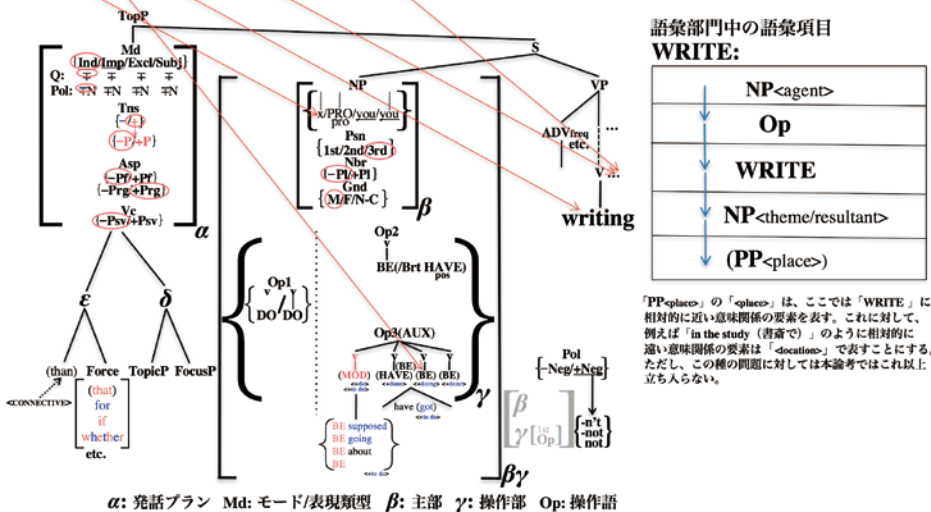
まず、(25c, d) の「there」は存在構文に現れる「虚辞」の「there」であり、情報量はほとんどない。(25c) は「there」以外の部分が「主述関係」を有している。(25d) の場合「there is」以外の部分は「writing 以下」が「a man」を後置修飾しているだけの構造のため(25c) の「主述関係」の場合よりは相対的に情報量が少ない。(25b) の場合は主部が(25c, d) の「there」の場合よりは情報量が多いものの「the man」が定表現であるため、それほど情報量が多くはない。一番分かりづらいのが(25a)であろう。情報量の多いはずの「a man」という不定表現で始まっているためである。因みに(25a) は英文として間違っている訳ではない。これは、例えば次のような状況で使用可能な文である。即ち、(25c) が「聞き手にとっては a man は未知情報であろう」と話し手が推定しつつ発話している場合であるのに対して、(25a) は、言及されている「a man」が聞き手にも現に「見えている」(実際にでも、写真などででも) というような場合である。仮に見知らぬ男であったとしても目視済みの人物であるために、(25c) の場合よりも情報量が若干多くなるのである。¹⁶

さて、情報構造はこのくらいにして、(24)=(25) の各文の構造がひな形方式に基づいてどのように明示されるかを見てみることにしよう。以下に示す(26)~(28) の如くなる。

¹⁶ (25a) に類する文が、例えば試験における「写真を見ながらの聞き取り問題」で散見する所以である。再び嫌味になってしまいが、受験者も出題者も本文で述べた程度のことは把握してから試験制度等を云々していただきたいものである。因みに、これとは別について最近、いわゆる存在構文における「虚辞 there + be」の後の NP を「主語ではない」と言い張る学者がいてたいへん驚いた経験がある。かかる御仁は存在構文のそれこそ存在理由を認識しているのであろうか。(cf. (27), (28))

(26) (= (25a)) ((25b) も, 情報構造以外の基本的な統語構造は同じ)

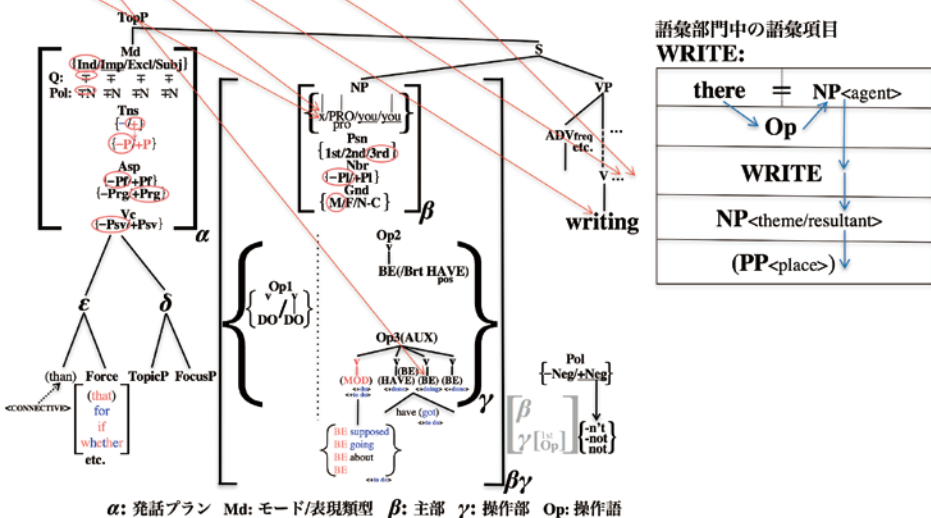
A man is writing something on a notepad.



主部「a/the man」は「VP 内主語仮説」（という「移動」操作を含意する仮説）を想定しないので、初めから「β」の「x」に入る。「is」は「進行相」を表す「BE」で「γ」の「OP3 (AUX)」の右から二番目の「BE」の slot に入る。「writing」は「V」の下に入る。語彙部門の側から眺めても、一目瞭然、素直に上から要素を拾う形である。

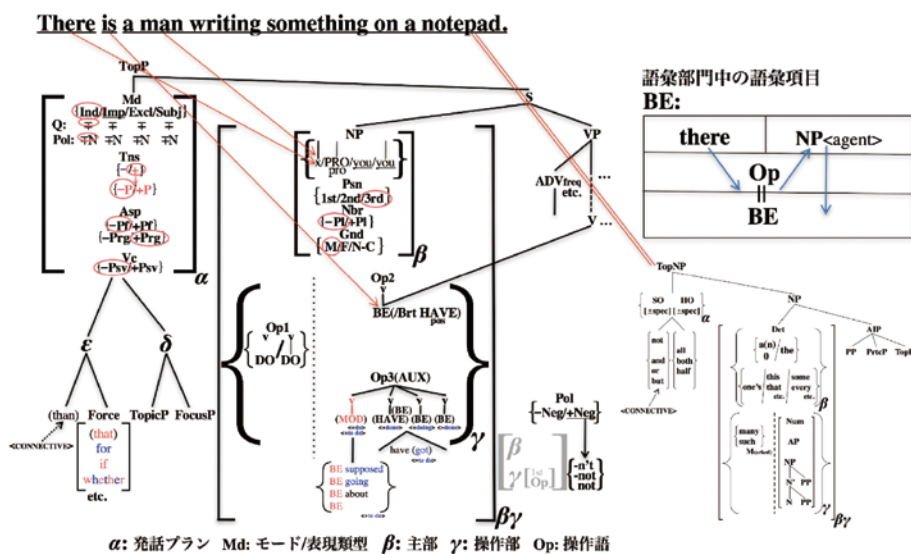
(27) (= (25c))

There is a man writing something on a notepad.



存在構文の主部は「there と a man」なので (27) のようになる。やはり生成文法流の（「繰り上げ」や「挿入」といった「構造変更規則＝書き換え規則」は想定しない。「VP 内主語仮説」（という「移動」操作を含意する仮説）も想定しないので、初めから「β」の「x」に入る、と見る。受動文の説明でも触れたが、① 生成文法流に主語位置が「空」であったというような英語では許されない構造を仮定する必要はないし、② (25) で見たように (25a) と (25c) とはそもそも情報構造が異なるのである。「is」は「進行相」を表す「BE」で「γ」の「OP3 (AUX)」の右から二番目の「BE」のスロットに入る。「writing」は「V」の下に入る。語彙部門の側から眺めても、一目瞭然、基本的には素直に上から要素を拾う形であるが、存在構文を使用する場合には、図に見るように「主部」の位置に「there」と「NP」とが並ぶ配置型となる。これは、言わずもがなではあるが、「WRITE」という語彙項目に初めから張り付いた配置型ではない。個々の具体的な場面で、情報構造上必要とされる場合（即ち、存在構文が要請される場合）にその都度盛られる情報である。

(28) (= (25d))



最後に (25d) の場合。「there is」以外の部分は「writing 以下」が「a man」を後置修飾している構造である。「a man…notepad」全体が「NP」なのでこの部分は (15) の名詞句のひな形「TopNP」に則る形となる。因みに、「writing 以下」は「TopNP」の「AIP (=Additional Information Phrase)」の「PrtcP」(=「分詞で始まる修飾句」)のスロットに入る。

以上本節では、ひな形方式の場合、生成文法の場合と異なり、存在構文が「構造変更」操作に依らずに出力可能であることを見た。この結論は「共時態」の理論としてまさしく期待

されるものであり、文法脳内実在論的観点や経済性の原則から言っても多とされるものである。不確定性の問題とも無縁な、エレガントでかつ統語部門の肥大化も来していない枠組である。また、この節では、存在構文との関わりで、これまでは等閑視されることの多かった情報構造の問題にも若干触れるところがあった。

2.2.3. 情報構造の分析

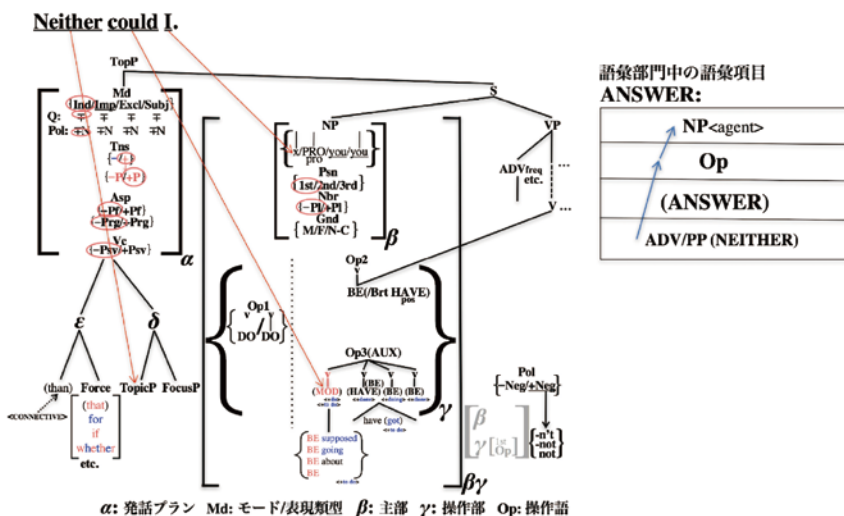
前節でも少し触れたが、本節では情報構造の分析について若干補足をしたい。(本格的な論述は稿を改めて行うことにする。)

情報構造上、以下のやり取りはひな形方式単層理論ではどのように説明されるだろうか。

- (29) a. A: I couldn't answer number 8.
 B: Neither could I.
 b. A: I'm hungry.
 B: So am I.
 c. A: Are you hungry?
 B: So I am.

情報構造上の流れに留意しつつ、それぞれのやり取りの B の発話に注目してみよう。まずは (29aB) から。

- (30) (= (29aB))

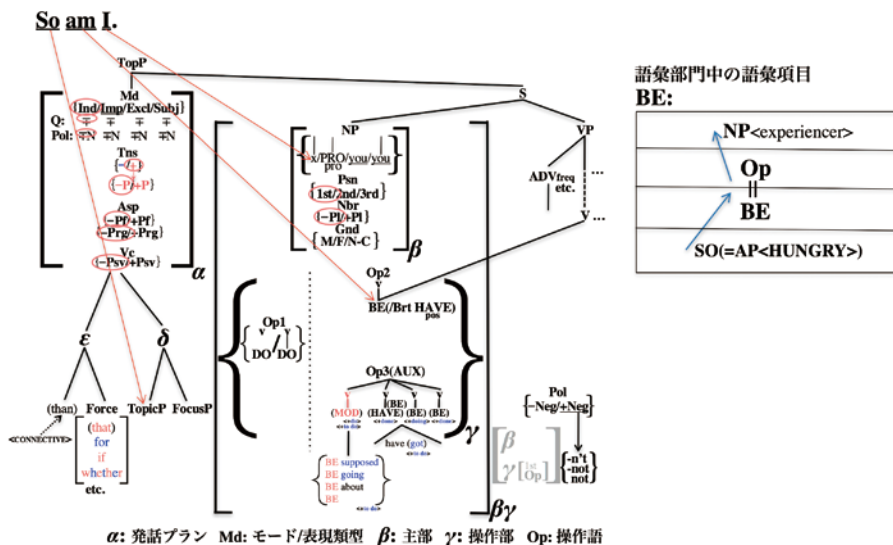


「否定語が前置されると倒置が起きる」「こうした倒置は強調のためのものである」といった機械的な説明がすぐにも聞こえてきそうだが、少々安易である。あるいは、(少なくとも)本当に理解しているか否か疑わしい。一般論としてはともかく、この文に関する限りはこうした「説明」は誤りである。もう少し綿密に考えてみよう。文脈を考慮するなら、「第8問が解けなかった」と言ったAに対するBの返答なのであるから、ここでの「neither」は「(当方も)同様の状況だ=解けなかった」という意味である。つまり、「解けなかったという否定の世界」はAが発話した段階で「旧情報」になっている訳であるから、ここでの「neither」を「強調のための前置」と取るのは誤りである。そうではなく「neither」はもはや前景ではなく背景的な情報となっている。ひな形の「 δ 」の「FocusP」(焦点句)ではなく「TopicP」(トピック句)のスロットに入る所以である。次に、「could I」という語順に注目しよう。「Neither」≠「強調」である以上、いわゆる「否定語という強調語の前置の故の」倒置ではない。ではなぜ倒置が起きているか。これも文脈を斟酌すれば答えに辿り着ける。Aが提示した「解けなかったという否定の世界」は既に旧情報だが、Bがそれに答える場合、一般的には概略2通りある。「ああそう」などと、あくまでも相手が関与する世界の話として返答する場合。もう一つは、(特に同一試験を自分も受けたのなら)こちらの状況はどうであったか答える場合である。ここではBは後者の選択肢を採っていて、かつ「(そちらだけでなく)こちらも」と言っている訳である。つまり「I」を前景化し焦点としたい訳である。そうした情報構造上の流れを語順の上で実現するにはどうしたらよいか。然り。「文末焦点の原則」に則り、焦点たる「I」(=「B」)を文末に配置する、ということである。発音上も当然「I」に卓立を置く。

さてそこまで分かったとしても、以上の知見を説明する文法理論の採る道はまた大きく2つに別れる。もうお分かりであろう。構造変更規則に依拠する多層理論対依拠しない単層理論である。ここではもちろんひな形方式の(30)ということになる。「移動」など存在しない。「要素の拾い方」の問題なのである。

次に(29bB)を見よう。

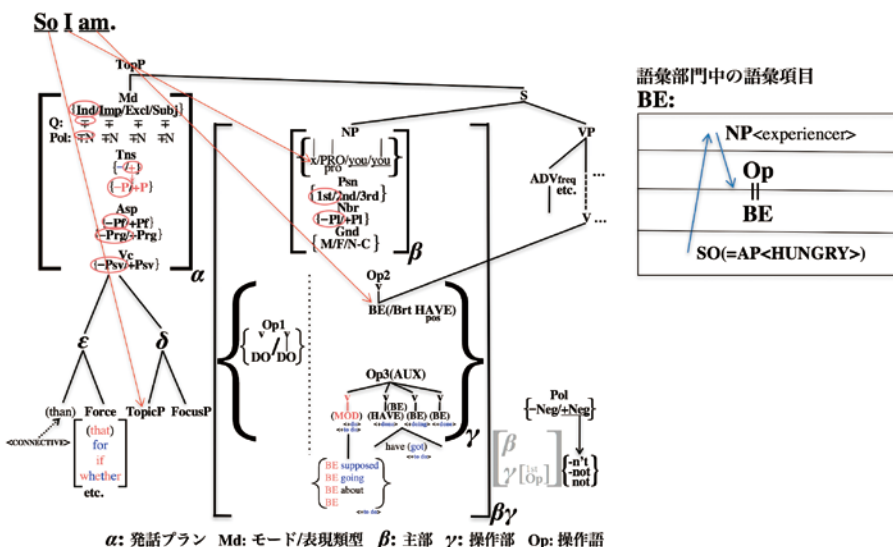
(31) (= (29bB))



詳しい説明はもはや不要であろう。「neither」→「so」, 「could」→「am」である。

最後に (29cB) を見よう。

(32) (= (29cB))



これもほぼお分かりであろう。文脈を考慮するなら、「お腹空いた？」と訊かれて「うん、空いた」と言っているのだから、ここでの「so」は「然り」で「旧情報」。次に、「I」は (31) (=29bB) の場合と異なり「旧情報」である。つまり、A は B に向かって訊いているのだから、

「B」=「I」=「旧情報」。「am」は(31)(=29bB)の場合と異なり「新情報」である。つまり、AにとってはBの答はどっちに転ぶかわからなかった「新情報」。「文末焦点の原則」に則り、焦点たる「am」を文末に配置する、ということである。発音上も当然「am」に卓立を置く。

以上本節では、ひな形方式流単相理論に依拠した形の情報構造の分析を示した。

3. 結 語

本論考では、英語に関し、「現実味のある」文法が充たすべき要件について、統語部門と語彙部門の関係に留意しつつ論じた。現在流布している「安易な立論に基づく、非現実的で牽強付会な理論」に対する代案としてひな形方式を提示した。

1節では、「外堀を埋める」意味で、言語学の外から言語を見る立場の誤謬について瞥見し、「安易な立論に基づくのではない、現実的で筋の通った理論」の要件について論じた。

2節では、言語学という「本丸を攻め」、「安易な立論に基づく、非現実的で牽強付会な理論」である多層理論の事例を検証した。併せて、「安易な立論に基づくのではない、現実的で筋の通った理論」の要件——単層理論——について、特に統語部門と形態部門の関係を中心に論じた。

生成文法は歴史も長く、研究人口も多く、理論の進展はさながら奔流ないし激流の如くであるが、遺憾ながら、その根底にはいつまでも変わらない旧態依然とした思考法も根強く残っているのが実情である。その代表格が本論考で触れた「共時態への通時態の混入」即ち「共時態への書き換え操作の温存」という誤謬である。本論考はそのほんの一端について触れたに過ぎない。今後仮に共時態から書き換え規則を捨てるということが万が一あったとしても、事は当然それで終わりではない。これまでに書き換え操作を大前提に営々と蓄積され続けてきた気の遠くなるような膨大な知見を新たな視点で検証する、実に困難な作業が茫洋たる海原の如く横たわっているのである。

参 照 文 献

- Abney, Steven P. (1987) *The English Noun Phrase in its Sentential Aspect*, Doctoral dissertation, The MIT.
- 有馬道子 (2017) 「逸脱表現とアブダクション 日本語と俳句とハイクとコンクリート・ポエトリー」, 天野みどり・早瀬尚子 (編) (2017) 『構文の意味と拡がり』, くろしお出版, 19-40.
- Bromberger, Sylvain and Morris Halle, (1989) “Why Phonology Is Different,” *Linguistic Inquiry*

- 20, 51-70, Reprinted in Kasher 1991.
- Chomsky, Noam. (1995) *Minimalist Program*, The MIT Press.
- Culicover, Peter W. and Ray S. Jackendoff (2005) *Simpler Syntax*, Oxford University Press.
- 藤田和也 (2015) 「英日の翻訳における誤訳・不適切訳の背後に潜む原理の探究」, 東北学院大学教養学部総合研究 <<http://raspberrries.jp/sgkk.html>>
- Fukui, Naoki and Margaret Speas (1986) “Specifiers and Projection,” *Papers in Theoretical Linguistics : MIT Working Papers in Linguistics* 8, ed. by Naoki Fukui, Tova R. Rapoport and Elizabeth Sagey, 128-172.
- 石橋結衣・千葉陽美・角掛菜月・早川夏実 (2018) 「言語理論構築の際の図式化の重要性」, 東北学院大学総合研究. <<http://raspberrries.jp/sgkk.html>>
- Jackendoff, Ray S. (1997) *The Architecture of the Language Faculty*, The MIT Press.
- (2001) *Foundations of Language*, Oxford University Press.
- Kasher, A., ed. (1991) *The Chomskyan Turn*, Oxford : Blackwell.
- Kitagawa, Yoshihisa (1986) *Subjects in Japanese and English*, Doctoral Dissertation, University of Massachusetts.
- 近藤安月子・姫野伴子 (2012) 『日本語文法の論点 43—「日本語らしさ」のナゾが氷解する—』, 研究社.
- Larson, R. (1988) On the Double Object Construction, *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.
- 佐藤怜美・小林維奈 (2013) 「ひな形方式に基づく英語の文構造再考」, 東北学院大学教養学部総合研究 <<http://raspberrries.jp/sgkk.html>>
- 高橋直彦 (1995) 「現代日本語の動詞の活用」, 『東北学院大学論集 (人間・言語・情報)』第 110 号, 東北学院大学, 107-178.
- (2001) 「「超特急」は快適だけど「超速ーい」は不快(?)」『東北学院大学 AV センター紀要』第 6 号.
- (2003) 「「超特急」は快適だけど「超速ーい」は不快(?)」 <http://raspberrries.jp/tab/tab_b0-3/tyoo/tyootokkyuu.html>
- (2005) 「英語の否定接頭辞 in-, un- の形態音韻論」, 『東北学院大学論集』第 142 号, 53-75.
- (2011) 「英語冠詞再訪」, 『東北学院大学教養学部論集』第 158 号, 東北学院大学, 15-39.
- (2017) 「かき混ぜ規則は不要である」, 『東北学院大学教養学部論集』第 176 号, 東北学院大学, 15-38.